柴田女子高等学校

住　所　弘前市豊原一の二の一
生徒数　九七五名
部員数　二三名
顧　問　松井　孝洋・佐藤　正

青森県高体連空手道部が発足してから、二十年の歳月が流れました。息を二回吸い、息を二回吐く内に二十年が過ぎた感じがします。本当に月日の立つのは早いものですね。

さて本校の空手道歴を振り返ってみますと、昭和48年4月に部が発足しました。ここに至るまで、私が本校につとめた時バスケットの顧問につき、二年後、応援団の顧問になりました。

この当時応援団とは名ばかりで、どうしたらもっと活発になるか考え、その結果大学時代にとった杵柄で団の演技の中に空手の技を入れることにしました。さっそく基本練習が始まりました。

この事が本校の空手道のはじまりでした。生徒は一生懸命練習しました。この頃はまだ空手道が青森では珍しい時代で生徒には新鮮に思えたようです。どうにかその成果もあらわれ、演技にキビキビした動きがあらわれ、県内でも注目されるようになり、団の研修会では毎年その演技を披露していました。やがてラジオ番組からも声がかかり、その番組に出演しました。生徒は団の演技で空手道を覚え、人前で演技する自信をどんどんとつけて、いきました。一般生徒は応援活動をみて、空手に触れるようになりそろそろ空手道部をつくる下地ができたと考え、当時の校長、木村正信先生に相談しました。木村校長は剣道の達人でその当時はいつも防具に身をつつみ、自ら生徒の指導に当たっていました。

武道には非常に理解のある方でした。ある朝、校長の所に行き「空手道部をつくりたいのです。空手道を通して立派な生徒を育ててみせます。」校長は直ぐ「いいだろう。しっかりがんばりなさい。」と直ぐに承諾して下さいました。この時は昭和48年4月のことでした。さあ、いよいよ部員集めです。まず自分の教えていた看護科の生徒に声をかけました。このクラスとはフィーリングが合いさっそく七名が入部してきました。さあいよいよ練習です。

生徒を集めて言いました。「これから練習を始めるがその前に聞いてもらいたい。先生は空手道を通して、立派な生徒をつくることを校長に約束した。一人でも血気にはやり、暴力を振ったり非行問題を起こすとそれみたことかやっぱり空手道はケンカに役立つだけで人格形成には役立たない。廃部にすべきだという声が上がってくる。絶対そうはさせたくない。存続か否かは今後の君達のがんばりにかかっている」かいつまんで言うとこういうような事を言った気がします。まだ練習場所が無かったので、天気の良い日は外で、雨の日は体育館の隅を借り練習が始まりました。私の空手歴は大学四年間そして卒業後、青森県で一番古い道場で、大学の師範でもあった対馬利夫先生の道場に通わせて頂いたり又大学の道場でも後輩と共に汗を流していましたので、体は自由に動き、絶好調の時でした。部員達は良く私の指導にしたがいめきめきと力をつけていきました。この頃はまだ高体連空手道部の中

には、女子部がありませんでしたので、大学に連れて行きそこで練習をしたり、道場に連れて行きそこで指導者に見てもらったりしながら部員は腕をみがいていきました。そうこうする内に高体連空手道部に女子部が出来ることになり、昭和50年6月に弘前市民体育館で始めて男子部の試合と同時に女子部の試合が型の優劣で行われることになりました。本校は確か平安二段の型をやり、女子部第一回の記念すべき大会を見事優勝することができました。この頃はまだ女の子が組手をやるとはもってのほかという雰囲気があり組手試合がありませんでした。大会の回数をこなすたびに型試合は高度な型に挑戦する学校が多くなり、又流派によって型が違うので青森県の規定型を作ることになり、ある日顧問の先生に集まって頂き、知恵をしぼりあって県独自の規定型が完成しました。形の予選は必ず規定型を決勝は自由型としました。現在の型試合は予選は指定型を決勝は自由形になっていますので、現在の方法に非常に似たやり方を県では全国に先がけて実施した訳です。その後、総体時に、型優勝、組手優勝とつづき、

晴れの全国大会（昭和56年名古屋大会　昭和57年熊本大会）と参加できました。ここまでは長い道のりでしたが、どうにか生徒にも晴れの舞台をふますことができ、すばらしい思い出をもたせ、卒業させることができました。

ここに至るまで多くさんの方の助言と援助があり、この紙面をお借りして心より感謝申し上げます。

現在（平成4年）の部員数は一年11名、二年5名、三年7名、の総数23名です。平成3年度の新人戦は型、組手共に優勝し、東北選抜、全国選抜大会に出場しました。

部員は皆明るく、素直にのびのびとしています。今後が楽しみです。